



Bill Moody/ビル・ムーディ

ムーディ氏は、編集委員、キリスト教科学実践士、また教師であり、米国、マサチューセッツ州、ウエスト・テイズベリーに住んでいる。

神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことをもって礼拝すべきである。
(ヨハネ 4:24)

神を、霊として発見する

霊 — 復活の背後にある力

Spirit — the power behind the resurrection



旧約聖書で最初に**神**について述べられるときから、新約聖書の最終章に至るまで、神性なるものの性格と本体は、しばしば、**霊**として表現されています。聖書の最初に出てくる3つの文は、次のように述べています：「はじめに**神**は天と地とを創造された。地は形なく、むなく、やみが淵のおもてにあり、**神**の霊が水のおもてをおおっていた。**神**は『光あれ』と言われた。すると光があった」（創世 1:1-3）。

『科学と健康—付聖書の鍵』で、メリー・ベーカー・エディは、**神**の本性は、神性の**霊**であることを明示しました、つまり、限界なく、限りなく、全能であり、遍在する**霊**であることを、提示しました。これは、**キリスト教科学**の神学と、その癒しの実践にとって、本質的なものです。**霊**がすべてであること、つまり、常に現存し、常に力強く、常に無限で、常に実質的であるということの意味を、十分に把握することが、**霊**に反するもの、あるいは**霊**に似ないものは何であれ、実質がないことを認める基盤となるのです。例えば、物質の本性は、一時的で、制約があり、有限であるため、**霊**の不朽の特質を現すことがで

きるはずがありません。従って、**キリスト教科学**の生徒は、信頼できる**霊**の力により頼んで、それが自らの人生を導き、光と霊的啓示をもたらし、そして、祈りに基づく癒しを効果的に実践するための確信を与えてくれるように願います。

キリスト・イエスは、**神**の本性は純粋な**霊**であることを理解していたため、彼が**神**に仕えた生涯を通して、霊的な力に絶対的に頼っていたに違いありません。**キリスト・イエス**が、「あらゆる種類の病」を癒したとき、海で生命を脅かす嵐を鎮めたとき、また、彼を滅ぼそうとする怒りの暴徒の間を気づかれずに逃れたとき、これらいずれの場合にも、**イエス**は、**霊**の無類の力を働かせていました。**イエス**は、神性の**霊**と、**神**の霊的創造の実在を、その正反対の証拠を肉体感覚がぶつけてきて、物質のみが人の生存の条件を規定し決定すると暗示するなかで、実証していたのです。

イエスは、**神**の霊的法則に絶対的に頼り、いわゆる物質的な法則の限界を無効としました。『科学と健康』は、**神**の本性が無限の**霊**であることを真に理解すると、どんな

物質的法則であれ、**神**の創造物を統治するという仮説には、正当な根拠がない、という結論に至ることを示しています。メリー・ベーカー・エディは、次のように書いています：「物質的法則などというものがあつたすれば、それは**霊・神**の至上性に対抗するもので、創造者の知恵を排撃することになる」。そして、この点を明確にするために、イエスの行動に触れています：「イエスは、波の上を歩き、群衆に食物を与え、病人を癒し、死人をよみがえらせ、もろもろの物質的法則とは正反対のこゝを行なつた。彼の行動は、**科学**の実証であつて、こうして物質的感覚や物質的法則の偽りの主張を克服したのである」(p. 273)。

ここに、イエスが、無限の**霊**の至上性を実証して限界をくつがえし、物質が生命の実質を構成するという信念にまつわる悲劇的な結果までもくつがえした、一つの例があります。新約聖書によると、この時、イエスは使徒たちや大勢の弟子たちとともに旅をしています。一日の旅を終えて、彼らは、ガリラヤの南西部にあるナインという町に来ます。イエスが町の門に近づくと、大きな葬列に出会います。聖書によると、この死んだ男性は、母親にとってたった一人の息子で、また母親は未亡人でした。イエスはこれを見て、母親に憐れみを感じます。イエスは、母親に、泣かないようにと優しく語りかけます。そこで、この**救世主**は、若い男が寝かされていた棺のわきに来ます、そして、その男に直接に話しかけるという、注目すべき瞬間がくるのです。

ルカの福音書は、この出来事を次のように伝えています。葬列の歩みが、完全に止まりました。イエスは、「若者よ、さあ、起きなさい」と宣言します。そして、まことに不思議なことが起こるので：「死人が起き上がった物を言い出した」のです。イエスは、その若者を母親に渡します、生きている、健康で、完全なかたちで渡すのです。もちろん、私たちには、母親の安堵と喜びの気持ちを想像することしかできません。しかし、聖書は、この神聖な出来事を目撃した人々がみ

な、畏敬の念を覚えた、と、明確に伝えていますが：「『大預言者がわたしたちの間に現れた』また、『**神**はその民を顧みてくださった』と伝えてあります (ルカ 7:11-16)。

この出来事、イエスが若者を死から生き返らせたことは、神性の**霊**の働きの結果でした、つまり、この生命を与える全能の力、霊的な法則は、どんなに悲惨な痛ましい人間経験にも作用するという証拠でした。このナインの町の門の外でイエスが達成したことは、間違いなく、「**霊・神**の至上性」を立証したことでした。そして、この同じ**霊**の至上性を、師イエスは、想像し得る最も厳しい試練、つまり、自らの十字架の受難において、必要とすることになるのです。

霊、**真理**のものを憎むこの世の意識は、自らの無意味さに直面することができませんでしたが、それを、イエスの癒しと救いの仕事は暴いたのです。イエスが使徒たちに教え、**霊**の全能と遍在について実証した、多くの事柄により、物質主義はその究極の崩壊に向かわされたのです。『**科学と健康**』は、次のように言明しています：「もし師イエスが、目に見えぬ**神**の真実を教えず、門弟を一人も取らなかったならば、彼は十字架にかけられることがなかったであろう。**霊**を物質の掌中に握っておこうという決意が、**真理**と**愛**の迫害者である」(p. 28)。

しかし、当然ながら、この「史上最高の物語」は、憎しみ、迫害、そして、イエスが、ただの罪人のように十字架に架けられた不名誉な死で、終わることはありません。むしろ、この物語は、栄光のうちに終わるのです。イエスが十字架に架けられ、岩で封じられた墓に埋葬された3日後、イエスの死体の世話をしようと墓にやってきた女性たちは、「彼はよみがえられた!」という、輝かしい天使の声に迎えられます。このメッセージは、その後、幾世紀を通して響きわたり、毎年、復活祭のときに、たたえられるのです。

『**科学と健康**』に示されている**キリスト教科学**の中核である「教義」の一つに、**救世主**の偉大な犠牲と勝利に関わるものがあります：「わたしたちは、イエスの十字架上の受

難と、彼の復活が、信仰を高めて、永遠の**生命**、すなわち**魂・霊**がすべてであり、物質が無であることを理解する助けとなったことを、認めます」(p. 497)。そして、イエスは、彼の永遠なる生命の実証を、復活をさらに越えて、その最終の結末まで高めることになるのです。つまり、メリー・ベーカー・エディが記しているように、「彼の忠実さに対する報いとして、彼はそれ以来昇天とよばれているあの変化を経て、物質的感覚から消えてしまおうとしていたのである」(『**科学と健康**』、p. 34)。イエスは、これで、**神**の子らすべてが持つ真の永遠の本性を、純粋に**霊**的に表明するために、地上のすべての塵の重さや、一時的な肉体が暗示する物質的な制限のすべてを、捨て去ることになるのです。イエスは、なんと貴重な贈り物を、私たちすべてのために、提示してくれたことでしょう。

霊が「すべてである」こと、つまり、**神**がすべての力であり、永遠に現存すること、この神性の実在についての偉大な事実は、今日もなお、女性男性に、次のことを約束し続けています：生存は、生命が物質にあるという短絡的な信念、物質性の痛みや気まぐれ、不和や破壊的な性向に、縛りつけられてはいないこと。そうではなく、私たちの真の自我は、神性の**真理**と**愛**の**霊**の実質を反映していることであること。私たちの人生は、「**霊**の至上性」の支配下にあるのです、つまり、全能で遍在する**霊**の、生命を与え、癒し、解放し、復活させる力の支配下にあるのです。✿